

理由も意味も 無い何か (試し読み)

微睡臚列



目次

閉塞	1
----------	---

閉塞

八畳の部屋の向かいの壁を見つめて・・・うな垂れる。

只うな垂れているのではない。異様なうな垂れ方なのだ。

『眼は閉じたままの方がきっと楽だろう・・・』と思って閉じてみるが眠れるわけではないし、きっとこの倦怠感けんたいかんは変わってはいないだろうけど、瞑つぶった方が一層だけ気だるくなつた気がする・・・。

そうして眼を開けると瞑つぶった時より又一層だけ気だるくなる・・・。

眼を開けると眼球の表面には変わらぬ八畳はちじょうが映り、そんな事を繰り返していると開けたままの口からぽたりと唾つばが垂れる。唾つばにすら泡が無く長い時間体は疎か体内の運動も無かつた事がわかる。

「ねえ？ いつまでそうしているの？」

女だ。視線の先に正座している。

「は一」

女は溜息を吐いた。

男は立ち上がり扉へと歩み寄る・・・。鍵が掛かっている事を確認したのだ。

なぜ？ そんな事をしたのかと言うと・・・。女はいなかったのだ。この部屋に・・・。

密室の中に行き成り現れた。しかし男は驚く顔を見せない。幻覚だと解っているのだ。

それを確認したのだ・・・。そうして又うな垂れる・・・。

女を気にする必要はない。とても綺麗な女だが結局は触る事すら出来ない。

パキッパキッ

不思議な音に男は顔を上げる。

女が位置と姿勢を変えていた。部屋の中央にあるテーブルに腰を降ろし足を組んで・・・何か？ 木の実の皮？・・・であろうか？ それをマニキュアの塗られた指先で剥いて食べている。

口に運ばれる瞬間を見てその実がピスタチオである事が分かった。

女は男を見詰める。

二つに割られた殻は組まれて足の付け根まで見える太腿やら、スカートやらの上に散らばっている。

「一発抜いてあげようか？」

男は「それは丁度いいお願いします」と一瞬声を出しそうになったが・・・それを制した。幻覚の女に言っても仕様が無いと思ったからではない。男は、そういう男なのだ・・・。何と言おうか・・・。性欲と言うものは虚数に過ぎない。幾ら足そうが引こうが移動しただけで結局は虚構なのだ。存在している物を知りたいのなら欲は可視外に置くべきだ。

男はそう言う男なのだ。

「今時、シュルレアリスムなんて流行んないよ」

男は反応を見せる。一つ吐く息を強くして見せた。

「奇妙な話に真理を一つ入れてやる」

女は眉間に皺を作ってそう言って、空中でパソコンのキーを叩く真似をして男を窺った。男は反応しない。しかし女にとっては反応しているのと同じだった。『無視しようとしている・・・』女はそう思った。そうして女は仰け反って高笑いをした。

「馬鹿だねー。あんたが思ってる様には、みんなあんたの伏線を理解してないよ」

女は又眉間に皺を作り男の真似をする。

「言葉一つ一つの印象、意味が終着点へと密接な繋がりを持っている」

女は笑う。

「そんな事が狙って出来たら、あんた今ここでうな垂れてはいないでしょ？」

男はタバコを取り出し吸い始めた。

「アホだねー。大学も出てない。高校も七流のをやっと出れたあんたが文章を書こう何てのがそもそも

も間違いだよ。いつからだっけ？ 小説家になりたいと思ったのは？」

男は何の反応も見せない。

「もう覚えてない位幼い頃だったけか？ じゃなんで今までこんなにも時間があつたのに、そのための勉強をして来なかったの？」

何が可笑しいのか？ 女は楽しそうに笑う。

『何で小説書いてんの？』て聞かれるとあんたいつもこう答えるよね」

女は眉間の皺を作る。

「面白い作品に出会わなかったから自分で作ろうと思ったんだ」

アハハハッハハハハアハ

「愚かだねー。こんなにも素晴らしい作品がごろごろしているのにそれを人並みに理解できない低脳・・・失敬^{しっけい}・・・底脳な自分に気づく事すらなく『面白い作品に出会わなかったんだ』」

ハッハハッハアアハッハハッハッハッハ

「ちょっとっ まってっ っ 息継ぎさせてっ腹痛い」

女は急に笑いを止めて、自分の座っているテーブルの自分の尻の斜め後ろの位置に手を付いてほんの少し顎を上げた。

「あーもう・・・出鱈目。デタラメ。でたらめに書いてる様にしか思えないよ？ ちょっと前のさ～

『男は「それは丁度いいお願いします」と一瞬声を出しそうになったが、それを制した。』可笑しいでしょこれ？ え？ 男と言う登場人物の印象がおかしな事になるでしょ？

あんたはそう書く事によって男が主人公ではないと言う曖昧な印象を付けたかったんだと思うけど、そんな事、誰も理解しないよ。

それに私がテーブルに手を付く位で『の』付けすぎなんだよ。そりゃ私があんたを理解していて攻撃的に褒める方に私の話の流れが変わる点ではあるから、私の行動を時間的に遅い観念で印象付けたかったのかもしれないけど文章的には糞だよ。理解してもらわなきゃ只のうんこだよ・・・これはホントに一発抜いてあげた方が良いみたいだね」

男のタバコはまだ吸い終えない。

「黙ってるといい様に言っちゃうよ」

男は落ちそうになった灰を灰皿に叩いただけで今は眼を閉じている。

「そう。じゃ言わせて貰いますけどね。

『^{しょうこ}昭子さん』あれね～十度目の旦那様が初めに言ってる事、誰もわかりませんよ。はあ・・・。
新しい物を取り入れ進化しようとする本能、その事が結婚指輪が嵌っているにも拘らず^{かかわ}昭子さんの髪を撫でた・・・。

それが一つ目。昭子さんが声も出さないのに一つ目を理解した事を解って『もう一つはなんだと思う？』そう聞いている。

二つ目は特別で唯一無比^{ゆいつむひ}の存在を形にする事。それは永遠で永遠に変わらない物。歴史に残る大発見をした人の名前がずっと残るような事、物」

・・・。

^{わけわか}
「訳解らん」

女はそう声を張って男の所まで歩み寄り平手で頭を強く叩いた。男はその反動を受けてそれを反して頭を上げ、女を斜めから睨み付けた。

女は女でそう来ると思っていた様に男の顔が上がると同時に数センチの距離まで顔を詰めて睨み返した。

「なに？」

・・・。

「さっきから・・・私には分かってるよ・・・。

『男は反応を見せる。一つ吐く息を強くして見せた』

『何が可笑しいのか？ 女は楽しそうに笑う』

そうきて『男は落ちそうになった灰を灰皿に叩いただけで今は眼を閉じている』

これ無言のあんたの存在を無視する訳ではなく存在感を作りながらあんたの心の動きも助長してるよね？ そんなのが分かればあんたがキレる所なんてわかるよ・・・。きっと初めにあんたを叩いても不思議そうにしているだけで怒らなかったでしょ？ そんな事は誰もわからないからね・・・。無意識に植え付ける事は出来てもストーリーを理解し様としているのは意識上の話しだから・・・はぁ・・・^{いしき さくほう}達式の作法にも程があらな」

男はそれを聞いて目を泳がせた。

「私が、あんたの事を気持ち良い位に理解してるから急に嬉しさが出てきて恥ずかしくなったとでも書くつもりでしょう？」

女の言う事は凶星だ。

『『昭子さん』についてまだ言いたいんだけど？』

男は返事も何もしない。只少し恥ずかしそうに顔を^そ逸らしている。

「一つ目は昭子さんを新しい物で取り入れるべき物であると口説いてる。しかも最上級の褒め千切り方。あんたにはそうかもしれないけど、分かるわけ無いからね？

二つ目は昭子さんが新しい物というだけではなく更に自分の中で^{みらいえいごう}未来永劫変わらぬ美しさを放つ物に出会った感動を二回昭子さんが^き訳わからなくても訊いている事で表現している。

初めの長台詞と旦那様の二度の質問を後から理解させる事で同時に理解した昭子さんは落ちるっと。ほ～・・・な訳あるかっ！

とまあ{前述|ぜんじゅつ}と同じ事を反復して書いているよう で、これは昭子さん目線の二つ

そう言い放って女はニコツとし首を傾けた。

「後ね『これは普通の時間干渉の話と違うのだよ』なんて言ってるけど主人公の旦那様が既に死んでるからって事でしょ？ 時間干渉じゃなくて只の妄想落ちじゃん！ 偉そうに」

女は立ち上がって腕時計を見た。

「あっと・・・とりあえず今言えるのはこんなもんかな・・・」

女は時計から眼を離すことなく喋る。

「そろそろ夕風になる・・・」

今までの言葉とは違い矛先が無くボソッと何かを考えながら女は呟いた。

「よし！ 行こっ！」

どこに行くのか解らない男は不思議そうに女を見上げる。

「あっ！ ここで私が妄想だと出さないって事は最初にした『幻覚だと解っているのだ。そうして又うな垂れる。女を気にする必要はない。とても綺麗な女だが結局は触る事すら出来ない』を、違和感を残して最後まで無視するつもりでしょ？

まあ、^{いじ}弄らなければ妄想の世界にどこで入ったかが分からないから落ちに繋がられるよね。そしてまた最後は妄想落ちにして『この女は妄想だ・・・』で書くのね？ それでこの鍵カッコで私がその事を指摘した事を使って私に《『やっぱり言ったよ』》でサードマン視点で言わせる気でしょ？」

・・・。

珍しく女は私の回答を待っている。しかし幾分^{いくぶん}かして女の言う事にはY e s としか答えられない事を理解したようだ。

「言わせてあげるから早く立ち上がって！ 行くよ！」

女は男に手を差し伸べる。白くて透明でとても美しい手だ。

「でも一つ言わせて・・・。これはそんなモノじゃない。理由も意味もない何か。理由も意

味も必要ない何か。手の込んだ物じゃなくて純粹で素直でプロセスも無く書きたいように書いた物なのよ。だから・・・ここで決めた結末は決して訪れない。訪れさせない！」

差し伸べられた手の反対側の手が力強く握られている事が男の目に止まった。

「さあ、行くよ」

男は女の手を取った。この八畳から出る事を決めたのだ・・・。いや、ここから出してくれると言う証明もない幽^{かすか}かな期待を差し伸べた女の手を握っただけだ。自分から何かしようと言うわけではない。兆^{きざ}しの方を向いただけなのだ。

「また・・・。はあ・・・。私について明らかにし過ぎじゃない？ これじゃ丸で私がこの糞野郎を救おうとしている正義の使者みたいじゃない？ そんないい人間じゃないよ私は。あーもう疲れるな。力強く握った手が意味しているモノはさ・・・私が全力を出しても出来るかどうか分からない事をなそうとしている。もしくは何度も失敗して『今回こそはきっと大丈夫』そんな感情を私が懐^{いだ}いている事を伝えたいんだよね？
それが分かれば『証明も無い幽かな期待を差し伸べた女の手を握っただけだ』ここを理解できるけど私の握った手を違う解釈されたら理解してもらえないんだからね。そこん所分かてる？」

それ書く事によって さ、私のあんたに対する今までの{罵倒罵声|ばとうばせい}が さ、あ

それは！ 言わないで！

「は？ あんた私に意見できると思ってんの？ あんたは私の口を塞ぐ事も暴力で止める事も出来ないし、触る事すら出来ないんだかんね？ 分かてる？」

女は「ふんっ」と鼻であしらった後続けた。

「言っちゃうからねーだ『いや、ここから出してくれるという・・・』ここね～。はい、はい、はいはい。

ここでなぜ八畳からとかこの部屋とか書かないかね。

『ここ』と書いたのはこの八畳部屋を出てもまだ越えなければ行けない過程が在る事をホント分かりずらーく書いてるね。場面が場面だけにどこを出るのか明確に『八畳』と書いたほうが普通ならいいよね。

そして『・・・八畳・・・いや・・・』この短な構成でその事は分かるよ。普通の人は今
はただ 『ここ』を使っただけだろうと思うから別に私が言ったってしっくり来ないだ
ろうけどさ。

そして、この後はあんたお得意の何ステージかに分けて書いていく手法だよねー。ばれ
ばれだからアハ。

私と男とでステージをクリアして行きエンディングを迎えるって感じのストーリー
にするんでしょ？ その途中で男が八畳部屋になぜ閉じこもっていたか？ 私は一体何し
に現れたか？ そんな事が明らかに成りつつ終盤近くに目的を書いて達成して お・わ・
り たかがそんな話でしょ？」

少し頭にきているが冷静に聞かせてもらいたいね？ どうしてこんな事するのだ？ これ
じゃ手詰まりに成ってしまったじゃないか？

「浅^あっさいね～。あんたの文章は。私がばらせばドンドンあんたの仕掛けがなくなってい
くでしょ？」

その通りだが、だからなぜ？ そんな事をするのだ？

「言ったでしょ。ここで決めた結末は決して訪れさせないって。あとね、情けない文章し
か書けないあんたの思いを勝手に私の手を使って表現しないでもらえる？ あんたの気持
ちまで代弁したかないんですけど」

あーそうですか。

「だいたいね『・・・さあ行くよ』なんつって私が言ったにも拘らず、なんでこんなに長
い台詞を私に言わせるかね？ 読んでる人は興ざめだよ。はぁ・・・いいから早く主体的
なストーリーを進めてよね。ホントに一発抜いてあげてもいいからさ。早くあのじじ
いと戦いたいんですけどー」

男は女の手を握ったまま立ち上がった。この小さくて薄暗い八畳部屋の扉に二人で
立った。

女はドアノブを握り、ガチャリと開くようにしたが・・・しかし扉はまだ開かれない。女
は握られた男の手ごと持ち上げて時計を見た。

「あと二十秒」

そう呟いて時計をみつめ続ける。

「十・九・八・七・六・五・四・三・二・一」

女は勢い良く扉を開いた。

人の怒号かと思うような風が扉から部屋に雪崩れ込み、耳を切って過ぎ去る風の音が男と女を戸口から押し戻す様に流れた。実際前に進むことは疎か呼吸孔を扉の外に向けると息さえ出来ない程だった。

「ちッ 少し早かったか・・・」

腕を口の前に翳し、呼吸を確保しながら女は舌打ちをした。

「でも大丈夫・・・きっと大丈夫・・・もう直ぐだから・・・？・・・」

「この私の言葉に二つ以上の意味を付けるための私との対話だったのね。クソ野郎。ふっ
やってくれる。あんたが良くやる三度同じ言葉を使って三つの意味を付ける仕組みを使う気でしょ？ でもね三度目に同じ言葉を出した時には心を折ってやるからね！」

片方の目を風を避けるために瞑って、息苦しさの中女は嬉しそうにそう言った。

赤いナイロンのリボンが一带に解け、何かとゆっくりと接しながら滑り墜ちる様な音に風は変わっていった。男にはそんな風に聞えた。風は夕風を迎えピタリと止まった。女は少し荒くなった鼻息を何とか落ち着かせるようにして、まだ完全に直らない呼吸をしながら男を引っ張り、この部屋を出た。

・・・。

理由も意味も無い何か（試し読み）

著 微睡臚列

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
